

自然環境を生かして音への気づきを促す教師の創意工夫

麓 洋介* 西垣 祥子**

* 幼児教育講座

** 附属幼稚園

A Teacher's Ingenuity to Use the Natural Environment to Encourage Young Children's Awareness of Sounds

Yohsuke FUMOTO* and Shoko NISHIGAKI**

*Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Kindergarten, Nagoya 461-0047, Japan

Keywords : 自然環境 音への気づき 教師の創意工夫

はじめに

令和4年度の共同研究においては、愛知教育大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園）の音響空間として前年度に改修された、通称「みどりの広場」に新たに設置されたウッドデッキに着目し、音楽活動用のステージとして保育における音楽表現遊びに繋げる実践を行った。みどりの広場に敷かれたウッドデッキと、そこを囲む空間の音響効果を生かして活動を設定することにより、園児たちは音に耳を澄ませ、一音一音丁寧に鳴らしてじっと聴き入る姿が見られた。

そこで令和5年度においては、附属幼稚園における自然環境に着目し、音への気づきを通して園児が様々な自然を感じ、楽しむための環境を設定した。

磯部によれば、「物との出会いのなかで「感じること」と「表すこと」を絶え間なく繰り返し、その過程に色や形が生み出されていく「デキゴト」」¹ そのものがアートであるという。そして、園児たちが音と出会い、音を感じていろいろな音を試し、自分なりの音の表現を見出す過程は、すなわち音楽であると言える。子どもが身の周りの自然と触れ合い、自然の中にある「音」と園児が出会う環境を作ることで、音楽表現活動へ繋げることがで

きると考えられた。

初めに麓から、風・雨・草木・石・砂などの自然物を生かした楽器や音遊びを提示した。それを元に担任教諭らと共に検討し、担任教諭や園児による手作り楽器を製作し園内に設置した。

紙コップなどによる風鈴を用いた環境設定

風鈴を製作し、音を通して風を感じられるよう環境を構成した。素材による音の違いを楽しむように紙コップやプラスチック製のコップを使用して製作した。紙コップには園児が好きな絵を描いて楽しむようにした。また紙の重りに風を受けると糸に付けられた鈴が鳴るようにした。年長児クラス、年中児クラス前に設置されたテントに吊るして、暑い日差しを避けて風鈴の音を楽しむようにした。また、紙コップに切り込みを入れて羽を付けることで、目に見えない風の存在をより感じられるように工夫した（図1-1、1-2、1-3）。

4 歳児の事例（担任教諭より）

手作りの風鈴の音はとても小さく、担任教諭は鈴の数や取り付ける位置、風を受ける紙の大きさ等を工夫した。しかし、園児たちは遊び疲れた時などテラスに横になった際に不意に聞こえるその小さい音に却って興味を示し、「よく聞いて、鈴虫の音がする」「かわいいね」「チリチリ

だって」などと話す様子や、心地よさを感じて、テントに揺れる風鈴を見ながらその下にござと本をもってきて読む様子が見られた。鈴のついている風鈴は紙とプラスチックによって音が違うことや、切り込みを入れた風鈴も風に乗ると羽の向きによって回る方向が違うことに気付いて楽しむ様子も見られた。



図 1-1、1-2、1-3 手作りの風鈴

竹のチャイムを用いた環境構成

掌大の輪に麻紐で細い竹を吊るした竹チャイムを製作した。中庭を年少児の遊び場にしたという担任教諭の意図から、製作した竹のチャイムを木に結び、遊びの環境を構成した。木の高いところ低いところにそれぞれ竹のチャイムを吊るした。高いチャイムは麻紐を引いて、低いチャイムは手で直接触って、園児が異なる鳴らし方で楽しめるよう工夫した（図 2-1、2-2、2-3）。

中庭は附属幼稚園の入口脇にあり、園児たちは毎日その前を通る。竹の乾いた音は良く響くこともあり、登降園時に少し寄り道をして竹のチャイムを鳴らしていく園児の様子が見られた。また、竹が当たる音だけでなく木

の葉が擦れる音に気付き、じっと耳を澄ませる子どもの様子も見られた。

3 歳児の事例（担任教諭より）

竹が当たると「カラカラ」と心地の良い音が鳴るため、はじめは教師が鳴らして見せていたが、音の面白さに気付くと子どもたちがこの場所に来ると自然と手を伸ばし、鳴らすようになった。この場所では虫探しをする子が多く「ダンゴムシにも聞こえるかな」と教師がつぶやいたことをきっかけに「出ておいで」「ダンゴムシさんおはよう、出ておいで」と言いながら鳴らす子どもの姿が見られた。



図 2-1、2-2、2-3 竹のチャイム

空き缶などによる雨の水琴を用いた環境構成

雨の日は、空き缶や缶の容器、プラスチック、筒など、様々な形状・素材のものを用意しておき、『あめのおとをきいてみよう』と書いて遊びの環境を設定した。雨が降ると外に出られず遊びが限定され、それまでの園児たちの遊びの繋がりも途切れてしまう。そのため、逆に雨の日ならではの遊びを楽しみたいという担任教諭のアイディアにより計画した。

雨どいから少しずつ雨が落ちていくところへ担任教諭が一つ容器を置き、容器に雨が当たって「ポタン、ポタン」と音が鳴るようにして園児たちに提示した。園児たちは、雨が落ちてくる様子をしゃがんでじっと眺めていたが、やがて手に容器を持って雨を受け、いろいろな音を楽しんでいた（図3-1、3-2、3-3）。



図3-1、3-2、3-3 雨の水琴

木の実のカップ

プラスチック容器を2つ貼り合わせ、その中に木の枝、ドングリなどの素材を入れた木の实のカップを製作した。園庭の奥に設置した、園児たちのためのスポーツジムに吊り下げ、園児たちがジャンプして鳴らせるように遊びの環境を設定した（図4）。



図4 木の实のカップ

5歳児の事例（担任教諭より）

A児が、担任教諭の置いた容器の上に違う容器を乗せて、またしばらく音を聞いていた。容器を置いては、じっと見て、音を聞いているような、雨が跳ねているのを見ているような、そんな姿だった。B児が興味をもってやってくると、A児は「ここに雨が落ちてくるよ」と雨の落ち場所を知らせて、数人で箱を積み上げていた。C児が空き缶をひっくり返すと少し音の高さが変わって、違う音になったことに気づき「違う音」とつぶやいた。担任教諭が「本当だね。同じものでもひっくり返すと違う音になるね。」と言うと、それを聞いて「私この音好き」「ぼくはこっちのが好きかな」と好きな音を見つける姿に繋がった。

まとめ

本研究における担任教諭による環境構成の工夫は、園児たちが自然を感じ、音への気付きを促すことに繋がった。事例からも園児たちは、音を注意深く聞きその違いを感じ楽しんでいる様子が見られた。担任教諭らの設定した場所以外においても、園児たちはいろいろな音に気付いて楽しむ様子がうかがえた。例えば、運動会において年長児がダンスに使用する旗について、音がはっきりと鳴る方がよいとの園児の意見から素材を変更した。また、ドングリを使ったおもちゃでは、ドングリの大きさや数量を変えて音を楽しむ場面も見られた。砂場遊びなど、音を鳴らすことを目的としない遊びでも音は鳴っている。担任

教諭らの創意工夫による働きかけによって、意識していなかった音への気付きは他の場面にも波及していくと考えられる。

音楽表現の視点からは、園児たちの音への気付きを歌遊び、楽器遊びへと発展、展開していくことが考えられる。歌遊びにおいては、自分や友達の声を意識して聴くことによって、いろいろな声や歌い方で遊ぶことができ、自然と歌唱表現が豊かになるだろう。また、楽器遊びでは、いろいろな奏法による音色の違いに気付いたり、合奏した際の響きを感じた

りして、みんなで合わせる楽しさをより楽しめるだろう。

また、本共同研究においては楽器製作から環境構成、また園児たちへの提示など直接的な援助に至るまで、西垣を中心とした担任教諭自らの手で行なったことで、臨機応変に対応でき、より日常の保育と関連付けることができたと考えられた。大学教員としての麓の役割は提案・助言に止めたが、この研究成果を生かして新たな提案をしていきたいと考えている。



引用・参考文献

- 1 磯部錦司・福田泰雅『保育のなかのアート』小学館、p.22、2015